

「子ども・家族福祉」—講義形態における知識・理解と問題関心の喚起

家政教育・金子省子

1. 授業科目の概要

学校教育教員養成課程の家政教育専修及び総合人間形成過程生活環境コースの選択科目である。家庭科教員免許状の選択科目、保育士資格の「保育の本質・目的の理解に関する科目」群の必修科目となっている。

受講生は、24名。内訳は学校教育教員養成課程3回生11名（このうち家政専修は1名、保育士養成コース所属が10名）、家政専修で保育士コース所属は0名）、生活環境コース3回生13名であった。受講生数が昨年度の2倍となり、昨年度に比べ保育士コース受講生の割合が高い年度となった。

授業の目的は「児童を取り巻く環境の現状をふまえ、児童福祉の理念、制度、方法、諸領域に関する課題について理解する」である。

主として学部DP1（知識・理解）に関する科目として、次の4点についての知識・理解に関して到達目標を掲げている。①児童問題・児童福祉の歴史的展開、理念 ②法制度と実施体制 ③保育、児童養護、健全育成などの諸領域についての施策の現状・課題 ④児童の権利条約の視点から捉えた児童福祉の課題

授業形態は、講義が中心で、教科書を使用し、プリント（授業概要を中心にまとめたレジュメ及び配布資料）、一部パワーポイントを用いた。このほか、グループごとにディスカッションをする時間を設けた。

2. 授業アンケート結果

①学部DPアンケート

回収数は学校教育教員養成課程11名、総合人間形成過程生活環境コース12名。この授業は学部DPについてDP1に主として対応する科目である。これについて両課程の学生とも全員が「十分貢献した」あるいは「貢献した」と回答した。

このほか、DP3、DP4及びDP5についても多数の学生が「貢献した」「十分に貢献した」と回答している。

②授業アンケート

第14回の最後に実施し、回答者数は21名だった。

<7項目について5段階評定>

5段階（a:強く思う b:やや思う c:どちらとも言えない d:あまりそう思わない e:全くそう思わない）で回答を求めた。また、進度・難易度について5段階（a:とても難 b:やや難 c:適切 d:やや容易 e:とても容易）で尋ねた。このほか、良かった点と改善すべき点を自由記述で回答を求めた。

(1)「出席状況の良好さ」は、aが8名、bが8名、cが3名、dが1名、eが1名で全体的には良好との自己評価だった。しかし3回生後期であり就活による欠席等が目立つ学生も一部みられた。

(2)「シラバスの提示、予定の伝達など」については、aが11名、bが10名で良好だった。

(3)「授業テーマと構成・展開の明確さ」については、aが11名、bが9名で、cが1名で毎回授業概要のレジュメを配布したこともあり理解ができていたと思われる。

(4)「教科書・資料利用の適切さ」については、aが7名、bが13名、dが1名で、肯定的な評価といえる。

(5)「進度や難易度の適切さ」については、「適切」11名、「やや難」が10名とほぼ半数に分かれた。

(6)「意見の発表や意見交換の機会の保障」については、bが10名、cが5名、dが6名で保障されたと回答する学生が最も多いものの、不十分と捉えた学生もかなりいた。

(7)「今後意欲をもって学びたい課題の発見」については、aが3名、bが13名と大半の学生が課題意識をもてたと回答している。しかしc（「どちらともいえない」）が3名、「あまりそう思わない」が2名おり、一部に今後につながる高い問題関心を得られなかった学生がいた。

<自由記述>

「良かった点」については19名が記述しており主なものは以下のようにまとめられる。

①生活と密接にかかわる多くの事項を学べた。新

聞やネットの資料も教材とされ学習と生活が結びつくことがあった。

②さまざまな資料が配布された。

③授業内容が明確で毎回のおおまかな流れがわかるプリントがあった

④最近の動向や教科書にない新しい情報を聞くことができた。

⑤松山の取り組みなど身近な実践例を知ることができた。

「改善すべき点」については、13名が記述しており主なものは以下のようにまとめられる。

①後半は講義が多く、集中力が途切れてしまったこともあった。座学が多く板書が少ない。パワポも使用した方が良い。

②もっと意見交換の機会があるとよかった。グループワークがもっとあった方が良い。

③範囲が広い。

④小テスト、復習の時間があった方が良い。

⑤毎回のレジュメがわかりにくかった。

⑥松山や愛媛以外の情報も知りたかった。

昨年度に比べ、ディスカッションの回数は減っていないが、学生からは講義形式のみの回に対する改善の意見が目立つ。学生数が増え、これまでの演習室での双方向のやりとりがやや難しかったことも背景にはあると考えられる。

3. 考察・課題

(1)授業における情報量の確保とディスカッションの時間の位置づけ

講義を主とする授業ではあるが、問題関心をもって学習をすすめるために、可能な限り考えを述べたり話し合ったりできる時間を設けた。しかし学生からは十分に意見を述べる時間がなかったとの意見がみられ、昨年度はみられなかった「座学が多い」という指摘があった。これは問題関心をもつことを目的とした前半部分でディスカッションの時間を設けたのに対し、後半、時間的に厳しいなかでほとんど講義形式となったことに対する意見だと考えられる。時間配分の問題は本年度も課題として残された。

(2)授業時間外学習

本年度は、気になる新聞記事の持ち寄りのほか地域の子育て支援活動の情報に各自がアクセスし、それを発表するなど、2週間程度の期間での課題提出を課した。情報の質そのものだけでなく情報へのアクセスに関する気づきが多くみられた。

(3)知識・理解の確認方法

中盤の試験実施について検討したが、時間的な

ことから行わず、記入式のプリント配布とした。このほか期末の試験に向けての復習について注意すべき点を指摘するなどした。第15回に実施した試験の結果は概ね良好だった。

4. まとめ・今後の課題

(1)問題関心の喚起

最終試験の際に、知識・理解を問う設問のほか、子育て支援と保育制度のいずれかを選択し、現状と課題を指摘した後に、自身の今後の取り組みに関して記述する問題を課した。

その記述を分析すると、「保育士として」、「家庭科教員として」、「地域の公務員として」、「親として」、など多様な視点からの取り組み課題が述べられている。特に変化する地域の情報を主体的に得ること、得られるような保育学習、情報を得るとともに伝達できる保育者になることが明確に意識化されていた。無記名のアンケートでは「今後も意欲的に学びたい課題の発見」が見いだせないとした学生が少数ながらいたこととの矛盾は、あえて問われれば、そして試験ならば、というこれらの学生の意欲の低さの表れとも考えられる。

(2)今後の課題

この授業では情報量が多く刻々変化する福祉制度に関する状況があるため教科書のほかプリント（概要は毎回、その他の情報を適宜配布）を活用する。内容に応じてパワポ使用の回も一部に設けた。

今後も教科書の利用の方法を検討する必要がある。また、プリントで概要がわかり取り組みやすいという意見がある一方で、板書やパワポをもっと使用してほしいという意見もみられた。「進捗や難易度」について「適切」と「やや難」がほぼ同数であり、理解の難しい学生にどのような資料提示やパワポ利用が有効なのかの検討をする必要がある。また、概要のプリントについても学生が受け身になることなく見通しをもてる工夫を進める必要がある。

授業時間外学習についても、これまでの課題探求型課題だけでなく、知識の復習や整理のための課題を課して、短時間の小テストを組み合わせるなどしていきたい。

講義を中心とする形態のなかで、基礎的な知識の理解、最新の情報や地域での取り組みについての理解、そして考え話し合う時間の保障を、授業時間内外の作業の組み合わせを検討しながら、今後行えるように取り組みたい。